



じびか歳時記 「秋の読書週間」 Vol136



今回の「じびか歳時記」のテーマは、秋の読書週間に読んでもらいたい一冊です。私は、是非に、現代語訳の「源氏物語」をすすめます。ウェィリーの英訳から、最近上梓された角田光代の「源氏物語」まで、代表的な作品の冒頭部分だけを、以下に紹介します。

At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who thought she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest. (The Tale of Genji: Arthur Waley 訳) (ある帝の宮殿に(彼が住んでいた時代は問題ないが)衣装や室内のお世話をする多くの高貴な女性たちの中に、ひとりの女性がいた。彼女は、それほど身分は高くはなかったが、他のすべての女性たちより、いっそう寵愛をうけていた)

どの天皇様の御代であったか、女御とか更衣とかいわれる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族ではないが深い御愛寵を得ている人があった。(全訳源氏物語：与謝野晶子)

何とかという帝の御代のことでしたか、女御や更衣が大勢伺候していました中に、たいして重い身分ではなくて、だれよりも時めいている方がありました。(新々訳源氏物語：谷崎潤一郎)

いつのころのことであったか、帝のおそばに多くの美しい人たちがお仕えしている中に、特に権門の出というのではなくて、きわだってご寵愛の厚い人があった。(源氏物語：円地文子)

光源氏、光源氏と、世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮ついた色ごのみの公達、ともてはやすのを、当の源氏はあじけないことに思っている。彼は真実のところまめやかでまじめな心持の青年である。(新源氏物語：田辺聖子) 【あまりにも有名な「桐壺」の帖を省略して「帚木」からの出だしです】

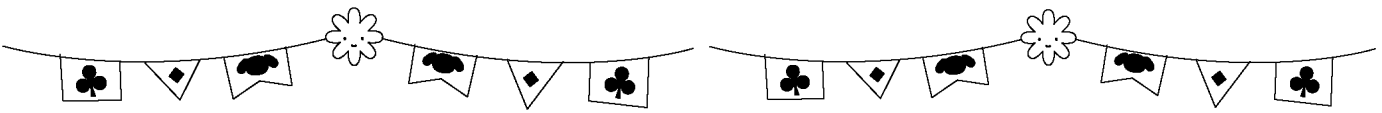
いつの御代のことでしたか、女御や更衣が賑々しくお仕えしておりました帝の後宮に、それほど高貴な家柄の御出身ではないのに、帝に誰よりも愛されて、はなばなしく優遇されていらっしゃる更衣がありました。(源氏物語：瀬戸内寂聴)

いつのことだったか、もう忘れてしまった。帝の後宮に女御更衣あまたひしめくその中に、そう上等という身分ではないが、抜きんでた寵を得て輝く女があった。女の身分は更衣である。(窯変源氏物語：橋本治)

いつの帝の御時だったのでしょうか。その昔、帝に深くいされている女がいた。宮廷では身分の高い者からそうでない者まで、幾人もの女たちがそれぞれに部屋を与えられ、帝に仕えていた。(源氏物語：角田光代)

では最後に、原文はどのような出だしか、新日本古典文学大系(岩波書店)の源氏物語から引用します。いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬがすぐれてときめき給ふありけり。(紫式部)

少しは、源氏物語に馴染んできて、読み(または再読)たくなりましたでしょうか。個人的には、初めての方にはさらっとよめる田辺聖子、少し深く読み込みたければ谷崎潤一郎のものをすすめます。私自身、原文を少しは読んででは中断する、を繰り返しており、いつかは完読したいと思っています。



～おすすめの本～

・子供を出産してからは絵本ばかり読むようになりましたので、その中でもお気に入りの絵本を紹介します。子供の1歳の誕生日にいただいた絵本で「大好き、ぎゅっ、ぎゅっ」という絵本です。1日の中で子供をいっぱいぎゅっと抱きしめる内容の絵本なのですが、娘も意味が分かるようになり、読みながら一緒に「大好き、ぎゅっ～」ってしてくれるので楽しいです。1歳半くらいからお薦めの絵本です(^)

・普段本を読まない私ですが、お薦めの絵本を紹介します。くすのきしげのり作「おこだでませんように」です。絵本の主人公の男の子が、いつも怒られてばかり、自分は悪い子なんだろうか・・・という内容で、私もいつも子供たちを怒ってばかりいるので、読んでいる途中で涙が出て、反省した本でした。そんな私を見て、子供たちは大爆笑していました(笑)

・何度も繰り返して読んでしまうのが、1953年に書かれたレイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説、「長いお別れ」。1970年代に映画化されたのですが、キャストがイメージ通りで、益々大好きになりました。オペラ感漂うアレクサンドル・デュマ・フィスの「椿姫」も好きです。

・昔もりやま耳鼻咽喉科のお薦めの本で出会った『100万回生きたねこ』佐野洋子作の絵本。100万回も死んで、100万回も生きたねこ。生きる事・必ずくる死・愛する・本当の幸せ、人生のその時々で、読む人によって感じ方の違う深い話の絵本。子供から大人まで楽しめると思います。

・「君の臍臓をたべたい」 住野よる

人付き合いが苦手な少年がクラスメイトの桜良が臍臓の病気で余命がもう長くないということを知ってしまうところから物語は始まります。性格が正反対の2人はそこから仲良くなるのですが、衝撃の結末に驚きました。“人はいつ死ぬか分からないということ”先日、そのことを考えさせられる出来事がありました。いま、コロナで会いたいの会えない人が沢山いると思います。1日でも早くコロナウイルスの終息を願うばかりです…この本は映画化やアニメ化もされているので本が苦手な方はこちらから見るのもおすすめです☆

・私が子供の頃から大好きだった本を紹介します。L.M. モンゴメリの『赤毛のアン』です。美しい自然のなかで、元気いっぱいのアンが巻き起こす愉快な事件の数々に、笑いあり、涙ありの、とっても素敵なお話です。舞台になっているプリンスエドワード島にも、いつか行ってみたいなと思います。大人になっても楽しめる本なので、ぜひ読んでみてください

・就職したての頃後輩からプレゼントされた絵本「大きな木」シェル・シルヴァスタイン作を紹介します。リンゴの木が一人の友達と仲良しになりできたての果実、枝、茎等自分の肉体をけずってまで友達に捧げる物語です。「それでも木は、うれしかった」与える愛に心うたれます。大人にすすめる絵本としてTVで紹介されました。ぜひどうぞ！

・今回、何を書こうか悩んでいた時にふっと思い出されたのが、沢木耕太郎さんの「深夜特急」です。一冊の本を読むのもやっと、という自分ですが6冊の文庫本を読了したのを思い出しました。コロナで外出自粛が続く中、本の中だけでも世界を旅する気分を味わえるお薦めの本です。

もりやま耳鼻咽喉科 おすすめの本 Vol136

